

静岡市立図書館の運営についての提言書

私たちの図書館が、まちを変える
～静岡市にふさわしい図書館～



2011年6月
静岡図書館友の会

静岡市立図書館の運営についての提言

- 1 教育委員会の責任で設置した、直営による図書館。
- 2 「静岡市立図書館の使命、目的とサービス方針」で語った方針に則った図書館。
- 3 正確で公平な情報公開がなされている図書館。
- 4 全館が一つのネットワークとして、有効に機能する図書館。
- 5 市民の代表である図書館協議会や利用者の声が届く図書館。

以上の項目を充たす図書館が今後の静岡市の図書館に必要なことを資料を添えて提言いたします。

発行 2007年5月20日
 頒価 100円
 編集・出版 静岡市の図書館をよくする会
 会長 草谷桂子
 〒420-0923 静岡市葵区川合2丁目21-43
 Tel Fax 054-261-3523
 mail keikok60@hotmail.com
 事務局 佐久間美紀子
 〒420-0023 静岡市葵区大工町8-11
 Tel 504-254-7400
 mail mksakuma@yahoo.co.jp

市民の図書館政策

Part 1 私たちが図書館に望むこと
～楽しさ・安らぎ・未来がある～

Part 2 私たちが図書館にできること
～市民と図書館は共に成長する～



静岡市の図書館をよくする会

前文 わたしたちの図書館が、まちを変える

学校に行けなくても、
 障害（しょうがい）や病気があっても、
 資産や職がなくても、
 組織に属していなくても、
 日本人でなくても、

どんな立場にあったとしても、

「知るチャンス・学ぶチャンス・読むチャンス」が得られる社会
 「知り方、学び方、読み方」を身につけることができる社会
 「知る喜び、学ぶ喜び、読む喜び」が得られる社会
 「知縁・学縁・読縁」を育む社会

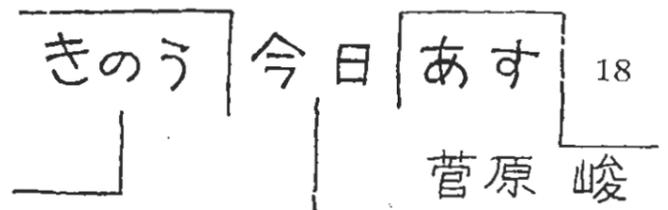
そんな社会を作ることが図書館の役割です。
 図書館は建物ではなく、あらゆる人々に、「知る権利、学ぶ権利、読む権利」を保障する社会システムであり、よりよく機能することで、市民を幸せにし、住みよいまちづくりを応援します。

100年後の子どもたちが「静岡市に住んでよかった!」とほめてくれる。
 静岡市を、そんなまちに変えていきましょう。

はじまりは図書館から



としよかん No.65 第三種郵便物認可 1998年8月15日発行



◆友の会とはなにか

Fさんから来信があった。友の会のことで図書館の職員と、昼食抜きで2時間も話したという。「図書館に都合のいいボランティアを集めて仕事をさせ」る、そのボランティアの集まりが友の会だと職員が考えていたらしい。

しかし、これは不思議でも何でもない。私もある図書館で、「友の会会員募集」のポスターが貼ってあるのを見て、友の会と図書館のいい関係のように思い、よくよくそのポスターを眺めてみた。ところが、友の会の活動が期待されてもいる。資金援助は、友の会の伝統的な活動の一つであるが、非営利団体への奨金が免税の対象となる事情も無視できない。また、つぎのように友の会と図書館長の関係について述べているのも興味深い。「図書館長と友の会とは、互いに敬意をもち、共に理想と目標を理解し、互いの達成能力を認め、成功の喜びを分かち合う、そのようなものであるべきです」

◆Friends of Library

アメリカでは、ほとんどの図書館に「友の会」があって活動している。Friends of LibraryとかLibrary Friendsと呼ぶものだ。そのSourcebook（アメリカ図書館協会・1996）なるものが手に入ったので、読んで貰うと、「図書館

友の会のめざすもの」という章

に、こんなことが書いてある。「人生に友人が必要なように、公共の機関にも友人が必要で。そしてどのような友情にも、支援と理解が大切です」「組織された友の会があるという事は、そのコミュニティにとって、図書館の重要性が公認されていることを意味します」「友の会は、会員の一人一人が、図書館のコミュニティに対する歩くPR媒体です」

そして、アメリカでも図書館予算が厳しく抑制され、資金集めに友の会の活動が期待されてもいる。資金援助は、友の会の伝統的な活動の一つであるが、非営利団体への奨金が免税の対象となる事情も無視できない。また、つぎのように友の会と図書館長の関係について述べているのも興味深い。「図書館長と友の会とは、互いに敬意をもち、共に理想と目標を理解し、互いの達成能力を認め、成功の喜びを分かち合う、そのようなものであるべきです」

ること。図書館の運営者が本当に友の会が欲しいと思わなければ、その組織を発展させることはできません

◆図書館とはなんだろうか

さてアメリカはアメリカとして、私たちの図書館づくり運動も、友の会を含めて、しっかり足下を固めるべきところにいるのではないだろうか。「図書館ができてからが本当の図書館づくり運動」と考える私は、今が正念場という気がしてならない。

図書館が欲しい、それもまず私の図書館が欲しい。これが図書館づくりの原点だし、その思いが連帯を求めて、地域の運動になる。そのとき、「欲しい」図書館とはどういうものか、そもそも図書館とは何か、それにしっかり答えられるだろうか。本を開いて、図書館とは何かの定義を見出すことは難しくない。しかし、その図書館はなぜ存在しているのか、私とその図書館を欲しいのは何故か。これへの答えは、めいめいが考え、書き記さなければならない。その「考える」ために必要なのが図書館であるのだが。

諫早市は、設計者を決めるのに、第1次を公開のプロポーザルによって、63の応募案をもとに7社を選んだ。いま9月末を目指して2次の設計競技が進行している。市民のネットワークは、これまでの運動を真に実りあるものにして、行政や議会と真剣勝負の真っ最中だが、ここでもあらためて「図書館とは何か」に突き当たっている。その答えをめいめいに持たなければ、図書館づくりは成功しない。

予想もできない菅原村長の旅立ちだった。「寄り掛かっていた壁が急に消えたようで不甲斐なく気持ちが不安定です」と友人達と交信をして、そうだ寄りかかっていたのだと自分を顧みた。日本の図書館や施設の課題は・・・などと偉そうに作文していても、考え行動する図書館人の中心に菅原村長達が居て、私はトロイ応援団のようで、自分の問題として自覚に欠けていたのかと愕然となる。同じ黒土星だよと励ましてくれた菅原峻村長のトドメの一喝であろうか。

村長は近年、各地の市民・友人に話した。「自分のまちの図書館の物語」を書き記すのは大切な一歩だと。ふと思ったのだが、それでは、菅原峻という「としょかん」はどういう物語として記せばよいのだろうか。1953.04.～日本図書館協会に奉職されて

「有山たかし生誕百年の今をどう捉えるか。図書館人の連帯は運動体でなければね。」思索行動し確信したスピリット、きのうを今日から明日へどうつなぐかを問いかけた。1978.12『現代の図書館』図書館建築特集 同年春「図書館計画施設研究所」を設立。計画から関わられた町田市立、日野市立、昭島市立図書館などの成果が明らかになり、

「1953～1978年の公共図書館の建築」執筆。満を持して図書館建築の特集を組んでいる。編集後記は千葉治さん、巻頭は鬼頭梓氏の名文「機能的ということ」。この論文集は何度も下線を引いた私達後進の教科書だ。

八戸市立図書館計画の経緯解説では、菅原村長が同志とされた故佐藤仁教授の文を引用、場の計画に対する真摯で謙虚な設計者の姿勢と観念主義への自省も記している。1981～2005『としょかん』100号の時代

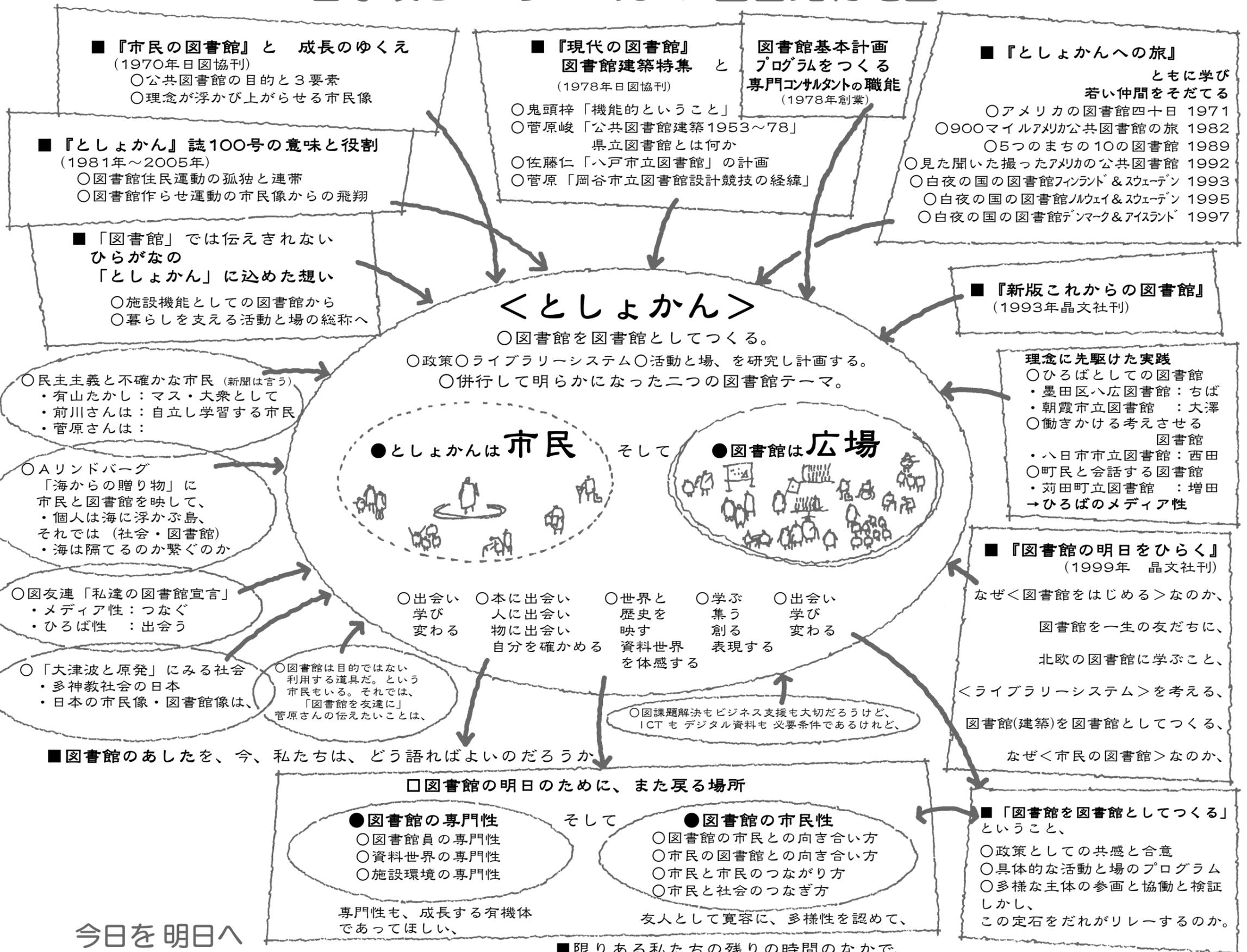
厚さ10cmになる同誌の綴りを再読すると、あらためて現在に繋がる課題が俯瞰される。主人公市民のあり方、図書館の本質である広場性、図書館員と資料世界と施設が持つべき専門性、それら成長してゆく将来像を、「図書館」でなくひらがなの「としょかん」に託した思いが見えてくる。村長自身の労作『市民の図書館』(1970刊)の次のパラダイムを歩きながら考えたのではないだろうか。

『新版これからの図書館』1993刊『図書館の明日をひらく』1999刊は、その俯瞰的な問いかけであり、ご一緒した米国や北欧への図書館旅行は若い仲間を育成する手段だった。図書館便りの形を革新し町民対話の図書館像を創出した増田浩次元館長の背を押して『苺田町立図書館の3000日』1997刊を編集し、図書館づくりの協働プロセスや出色の図書館条例を形にした森田一雄元館長の伊万里市民図書館物語を喧伝されたことなども、図書館づくりの現場から立学してゆく菅原村長の真骨頂であったと思い出している。

「図書館を図書館としてつくる」こと 菅原村長の物語に流れるこの通奏低音に共鳴した私達は、少数派だが、この姿勢を墨守して次の世代につないでゆくしかない。(てらだ よしろう/としょかん村同人)

今日を明日へ
—菅原さんの口癖—

菅原峻さんをしのぶ会 ー図書館の明日をかたる集いー 菅原峻さんが歩いて見せた図書館村地図



限りある私たちの残りの時間のなかで、
どれだけ、若い仲間をつくり、はぐくみ、
共感した大切なバトンを申し送ることができるか。